
【企画】覆面小説家になろう～空～

覆面作者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【企画】覆面小説家になろう〜空〜

【Nコード】

N3912F

【作者名】

覆面作者

【あらすじ】

9名の名を隠した作者による5000文字以内の短編集。今回のテーマは空。貴方は彼らの覆面を剥がすことができるでしょうか。

No.00 はじめに

この作品は【覆面小説家になろう】という企画の短編集です。
今回のテーマは「空」

10人の覆面作家たちが描く空の物語をご覧ください。

そして貴方は、彼らの覆面の中身を当てることができでしょうか。

推理も併せてお楽しみください。

以下、各話あらすじです。

No.01 あの空の一番近くへ

平凡な帰宅部員、女子高生の吉岡美空は空を見上げるのが好きだ。
いつものように空を見上げていると、彼女のもとに空が落ちてきた。

No.02 君は天然色

君は僕の記憶に鮮明な思い出を残していった。華やかな七色の天然色と共に。

No.03 ありがとう、そら

八月のある日、女工中田安寿は空を見上げる女工「そら」と出会う。

彼女が空を見ている理由とは。。。

No. 4 空の王女と大地の騎士

このお話は、昔、ある国に住んでいたお姫様のお話。
どんなお話かって？ それは聞いてからの楽しみ。

ええ？ ヒント？

そうね、お姫様と騎士との恋物語といったところかしら。

No. 5 自由な野良猫

どこにでもある日常。

辺りを見回せば、きつと見つかるであろう平凡な日々。

だからこそ人々は忘れてしまうのだろう。そんな毎日がどれだけ
幸せなのかを……

この物語は、そんな日々を大切に思う老人と一匹の野良猫が魅せ
る、長い人生の短い一ページ。

目に見えない絆が見える、そんなひと時である。

No. 6 楽園の虹

『兄ちゃん達、いい仕事があるんだけどな、楽園で仕事してみない
かい？』

甘い言葉と金につられて楽園に行った若者達は、そこで見たこと
もない美しい景色に遭遇する。

しかし、その代償はあまりにも大きかった。

No. 7 FUMIKIRI

開かない踏切の前に立ち尽くす男。あまりに退屈なため、脳内で
独り言を巡ら

せる。

No. 8 空の騎士様

秋が来たミジ。稲が穂をつけると米の育成段階に入り田んぼの水
は減らされるミジ。私達ミジンコは減っていく水の小さな世界で健

気に暮らしてるミジよ。厳しいオーディションで選ばれた16匹とダンサーのみなさんと、生きのよい精子1本（ご提供ありがとうございましてミジ）の、不思議なミジンコのドタバタ劇ミジ。あたし？ くじ引きであらずじ担当になったミジンコのダフニアよ。教科書の専属モデルやってるミジ。今回は出演できなくて残念ミジ。あ、いつけなあーい。始まりの掛け声をしないと。では開幕ミジ

No.09 羅漢さん

夢に出てくる澄んだ青空は、私に何を教えてくれるのだろう。

「羅漢さん」が通る家で、忘れてはならない、大事な過去を思い出す。

以上、9編

覆面作者名簿（50音順敬称略）

k a z u y a

カトラス

工場長

ドリーク

ハシルケンシロウ

B I R U S U

牧屋美邦

ミラージュ

雪鈴るな

以上、9名

それでは覆面小説空ブロックをお楽しみください。

日ノ本空、16歳。日聖大学付属川崎高校サッカー部所属、ポジション、フォワード。

「どうやら彼、一年生にしてチームのエースストライカーとか言うやつみたい。あたしのサッカー知識は今だに、

「オフサイドってなに？」

「って空くんに聞いてちゃう程度なんだけど、それでも一発で理解できたことはある。それは、

「あんたみたいなドジっ子がエースなんかやってっから、いっつもうちは初戦で負けちゃうのよ！」

「ってこと。あれだけの恥をかいたんだから、この程度の嫌味の一つも言っつてやんないともう気が済まない。実際エース張れるようなコにも見えないし。」

「とまあ、ここまでが最悪の出会いの日にした日ノ本空の情報。何でこんなパーソナルデータを知ってるのかって？ そりゃあのポケナスが、

「詫びにパフェの一杯でも奢るよ、いや、是非奢らせてくれ」

「とかほざいて、強引に茶店に連れ込んだからよ。たく冗談じゃないわよ、何であんな、人の脚の間からかつり股ぐら覗いたド変態と茶あなんか……。腹いせに八千円も奢らせてやったわ！」

「でもあいつ、あたしの例の嫌味の返事に、凄くカツコイイこと言っただ。」

「爛々と輝く一片の疑いもない眼差しと、自信に満ち満ちた口調で、」
「でも俺が日大川崎サッカー部の歴史を変えますよ。いや、必ず変えて見せます！」

その真剣な一言に、本の一瞬、こいつのこと見直したんだよね。

あーっ、もうだめ。あたし、あの言葉に完全にノックアウトされ

ちゃった。だって、気付いた時には毎日練習見に来てて、しかもなんか、マネージャーのまね事みたいな事してんだもん。だって気になるじゃん、こんなザコチームをあんなドジっ子エースがどうやって変える気なのか。こないだのアクシデントの理由だって、

「いや、あれはその、バナナの皮に滑ったんすよ」

だよ？ まあ坂登ったら実際あつただけだね、踏み潰されたバナナの皮……。

いやもう、ホントに凄いわ空のやつ。どうやら伊達や酔狂で俺が変えるとか言ってた訳じゃ無いみたい。あたしみたいなド素人にもはつきり解るぐらい、あれは凄い。

背が高いっていうのはサッカーにおいて好選手の条件の一つらしいんだけど、あいつ、194もあんのよね。それじゃただデカいだけなんだけど、それがまた、1.5メートルぐらい跳ねるんだわ。なんなの？ あの人並外れた垂直飛びは。

あたしもあたしで、頑張ってるあいつ見てたらじっとしてらんなくなつて、帰宅部からはご卒業。普通ここはサッカー部のマネージャーなんだろうけど、なぜかあいつのためについて気持ちじゃなくて、あいつには負けたくないっていう負けん気が出てきちゃって。

結局あたしの選んだ道は、運よくあつてくれた女子サッカー部……、じゃなくて、陸上ハイジャンプ。まあほら、高校二年にもなつてオフサイドも解つて無いようなやつがいきなり途中入部したつて、何の戦力にもなりやしないことは解り切ってるし、それより何より、悔しいかなあたしがあいつのプレイで感動させられちゃったのは、サッカー自体じゃなくてあの垂直飛びなんだから！ だから、ハイジャンプ。高く跳べは跳ぶほど、大好きな空に近付けるんだつてもあるしね。

もう認める。はい認めます。あたし吉岡美空は日ノ本空に惚れま
した！今はもういつそれを空くんに切り出すか、その取っ掛かり
を探してる段階。

だって空くん、サッカーが恋人みたいなもんだから、そういうの
ちつとも気にしてなさそうだし。多分女の子のほうからほしいと言
い出したってオツケーだよ？ つんくさん。

ってな訳で、いつにしようかなー、告るの。あの坂を空くんと二
人でダツシユすることになったせいかな、なんかすんなり高校総体ク
ラスの高さ跳べるようになったし、総体の選手宣誓で暗喩し
ちゃおっかなー。そうだ。そうしよう。うーん、我ながらナイス考
え。全国の総体フアンの前で告っちゃうぜー！ って浮かれても、
宣誓回って来なきや意味無いんだよ。

あーっ、やっぱ一旦好きになると離れたなくなるのが女の子な
んだよね。時々サッカー部が実戦練習でクリアしたボールがあたし
を直撃したりするけど、それだけあたしと空くんと距離が近いっ
てことだもん。これはもう心地いい痛み。痛いのが心地いいって、
あたし実はMだったりすんのかな……。

まあ、戯れ事はさておき、今日の彼、気合い入ってるわね。凄い
よ、もう5得点。サッカーって確か、3点とれば大量点なんですよ
？ 一人で一人でこんなに取れちゃう訳。やっぱタツパは武器なん
だねえ。凄い！ あら、6点目……。

それじゃあたしも、あの日見とれた150でも跳びますか。助走
は大腿で目標50センチ手前から左足で真上に踏切。そのまま頭か
らバーを越え、背中、お尻、脚とバーを巻き込んでいく。バフツと
重たい音を発して、あたしだけマットに墜落し、なんとかクリアで
きました。

いやーそれにしても、太陽が眩しかったなあ。大空の向こう側に
燦然と輝く絶対的な存在。あたしにとっての太陽は、やっぱ空くん

かな。

いよいよ空くんの国立競技場への挑戦が近付いてきた10月。互いに共有できる数少ない時間が今日もまたやって来る。とは言っても、あたしはもうへとへとで、それどころじゃないんだけどね。完璧にオーバークーク気味……。

「先輩、無理ならついて来なくていいですよ？ この坂ダッシュは、あくまでもただの俺の自主練なんだから」

なんなの、この子。なんであんな練習の後で、息切れ一つしてないの？ あー、やだ。これが男女の体力差ってやつなの？ あたしだってもう、アスリートとしての身体になってる筈なのに……。

悔しい……。

「何言ってるのよ、あたしだって伊達に一年長く生きてる訳じゃないんだから、あんたなんか絶対負けないんだからね！」

あーあ、言っちゃった。どうしていつもこんな事ばっか言っちゃうんだろ。ホントは真つすぐ目を見つめることもできないくらい大好きなのに。意識してるのに。

「まあ、来るなら来るで構いませんけど。ただ俺大会近いから、本数増やしていきますからね。無理だと思ったら切り上げていいですよ」

キィ、くやしー！！

空のくせに！ なにあたしが付いて行けないって頭から決め付けてんのよ、ドジっ子の分際で！

こうなったら根性見せるわよ。必ず最後に愛は勝つんだからね！

「望むところ」

そしてこの勝負に勝ったら……、勢いに乗って告げてやる！

……、……、疲れた……。もう、クタクタ……。

「目眩……」

ほんとに目眩する。もうそれぐらい疲れてる。限界。ただか三往復でバテるなんて。あたしって、アスリートとしてまだまだひよっ子だったんだ。隣の空くんは全然余裕な感じ。ビビるを通り越して、呆れる。

「ちよつと休んだほうが良くないっすか」

とか言いだす始末。あーっ、悔しい。だから、まだ付いてく。正直腰フラフラなだけどね。

心臓破りの急坂。縁石のみの歩道。フラフラなあたし。そして、後ろから轟音。ある意味、こうなる条件は揃ってたのかもしれない。「あっ」

足が纏れて縁石を身体が乗り越えていく。後ろから轟音。反射的に振り向いた先には、大型トラック。

《やばい、轢かれる》

そう思った瞬間、あたしの身体は車道とは逆方向に飛んでたんだ。なにかあったか理解するまで時間がかかったのは、それ程くたびれてたのと、血まみれの空くんが道に倒れてたから。

「ああっ、ごめんなさい、空くん、ごめんなさい」

血まみれの空くんを抱きながらひたすら謝った。明らかにあたしのせい。ケータイを取って救急車を呼ぶと、また抱き抱えて、ひたすら謝る。

「俺は……、空だ」

虫の息な空くんがボソボソと語り出す。

「そんな事解ってるよ、空くんは空くんだよ」
「好き……、だ。だから、誰も俺に……、近付けないで……くれ」
えっなに、どういう意味なの？ 意味解んないよ。
「美空が……、誰よりも高く……飛ぶんだ……。他の……、どの女より、俺の……、空の近く……に……、……」
それつきり空くん、なにも言わなくなった。ぐったりして重みが倍ぐらいに増す。人から物に変わった瞬間を実感したあたしは、人目もはばからず、大声で、泣いた。

2009年高校総体。こんな年に、空くんが居る筈なのに居ない年に、選手宣誓が回って来ちゃった。でも、ちゃんと告るよ！ あんな言い逃げ、絶対に許せないもん。

「宣誓！ 我々、選手一同は！ あの、空の向こう側で輝く太陽に！ 胸を張ってこれまでの努力の成果を示せるよう！ 正々堂々！ 全力を尽くすことを！ 誓います！ 2009年8月10日、選手代表、日聖大学付属川崎高等学校、吉岡美空！」

よっしゃ！ 言いたいこと言えたー！ 空くん、最期に「俺は空だ」って言ってたけど、あたしにとっては太陽だったんだよ。
これから約束通り、どの女より近くに跳んで見せるからね。まずはこの総体で。

No. 02 君は天然色

九月。

季節の変わり目を迎えるこの時期は、空を雲が覆い景色から鮮やかな秋の色彩を奪い取る。

せつかくの休日も気紛れなにわか雨に外出の機会を足止めされ、この空と同じ様にモノクロームな僕の心の屋根にもザーザーと鋭い水針を突き刺してくる。

冷たさが染みる傷口を癒やすように、僕は淡い恋心の思い出が詰まった一枚のアルバムを開く。

色鮮やかな七色の天然色と共に、今も変わらず僕に笑いかけられる君のその姿はとても愛らしく、そしてとても美しい。

赤。

梅雨の鬱陶しい雨の日でも、真っ赤な傘をクルクルと回しながら楽しそうに雨の街を歩く君の姿に、僕は初恋にも近いときめきを抱いた。

橙。

遊園地で大好きなオレンジジュースを飲みながら、満面の笑みを見せてくれた君の姿に、僕は一瞬で五感の全てを奪われてしまった。

黄。

真夏の海水浴場、眩しい黄色の水着姿で楽しそうにはしゃぐ君の姿に、僕は釘付けになりながらも君を見る周りの他の男性達に軽く嫉妬した。

緑。

心地良い風に吹かれ、辺りの森林のざわめきに目を閉じ耳を澄ま

せる君の姿に、僕は春風が遣わさせた森の妖精の姿に錯覚した。

青。

街中が賑やかな青いネオンサインで飾られたクリスマスの日、僕の帰りを待ちきれずにサンタの人形を抱いて静かに寝息を立てる君の姿に、僕はこの幸せな時間がこのまま止まってくれないものかと心から願った。

藍。

桜が咲き乱れる高校の卒業式、藍色のセーラー服に卒業表彰を持ってこちらにピースサインをする君の姿に、僕は君と一緒に過ごしてきた時代の流れの早さを改めて痛感させられた。

紫。

一月の雪が降り積もる成人式、すっかり大人の女性になり紫基調の美しい和服姿に身を包んでこちらに振り返る君の姿に、僕は改めて恋に落ちた。

君に初めて出逢ってから、僕の人生は君だけの為にあつたようなものだった。

君が笑ってくれるなら、君の笑顔を守る為なら、僕はどんなに辛い事でも立ち向かう事が出来た。

世界中の誰よりも、どんな勇敢な戦士よりも、どんな名声高き権力者よりも強い存在でいられる事が出来た。

君の楽しそうにはしゃぐ姿を見ると、僕も一緒に嬉しくなって天にも上る様な幸せな気分になった。

君の悲しみに涙にくれる姿を見ると、僕も一緒に苦しくなって自分の無力さが悔しくて情けなくなった。

全ての喜怒哀楽を一緒に体験して、時にはつまらない事で折り合いがつかなくなってケンカした時だってあった。

ある時は君がわがままを言つて僕を困らせたり、ある時は僕が大切に想うがあまりに君を無理に束縛してしまつたり。

でも、優しい君は最後は笑つて許してくれると、仲直りのしるしとしていつも僕の頬にキスをしてくれた。

はにかみながら少し恥ずかしそうに振る舞うその姿に、僕もすっかりそれまでの事を忘れ君を許してしまう。

僕はいつも君の秋風みたいな無邪気な気まぐれに振り回されて、まるで風見鶏の様に右へ左へクルクルと向きを変えられてばかりだった。

のんびり屋の僕とは対照的に、せっかちで元気一杯の君はいつも僕の手を無理矢理引つ張つて先を急かしてばかりだった。

でも、それが嬉しかった。僕の手を握る君の手のひらはとても暖かくて、そして何より優しかった。君と手を繋いで同じ道を歩く事が、僕の一番の幸せだった。

いつまでもこうしていたいと思つた。いつまでもずっと一緒に手を繋いでいたいと思つた。いられると思つた。

でも、それは叶わない夢だった。いつしか僕らの目の前に現れた二本の分かれ道で、君は僕の手を離れもう一本の別の道へと歩いてしまつた。

その場に立ち尽くす僕を一人置いて、君は振り向きもせず自らの意志で決めた道を進んでいく。最後にただ一つ、泣きながら別れの言葉を僕に伝えて。

決して叶う事の無い淡い片思いだった。そんな事は最初からわかつていた。でも、それでも僕は君と同じ時間を過ごせた事が幸せだった。君に恋心を抱けた事がとても幸せだった。

きつと僕はこの先将来、こんな素敵な恋に巡り会える事は二度と無いだろう。君と分かち合えた思い出の数々は、一生かけても決して忘れる事は無いだろう。

どんな脚本家でも書く事の出来ない君と僕との最高のラブストーリーは、こうして最後の幕を降ろしたんだ。観客のいない静かな舞台上に、たった一人僕だけを残して。

「いつまでそんな寝ぼけた事を仰られているんですか？いい加減、もうそろそろ立ち直ったらどうですか？」

アルバムを眺める僕の横で、女房が呆れた顔をして居間のちゃぶ台を布巾で磨いている。その上には、湯気が立つ煎れ立てのお茶が注がれた湯呑みが置かれてあった。

「恋だの愛だの、もうそんな甘い話をしている歳でもないじゃないですか？若い娘に夢中になるのもいいですけど、少しは自分の女房に対してもそれくらい熱くなって欲しいものですけどね？」

湯呑みの中に立つ茶柱の様に、女房の鋭い僻みが更に失恋の傷をチクリチクリと刺してくる。僕が大きな溜め息を一つ吐くと、女房は見え透いた様に苦笑し一言漏らした。

「大切な可愛い一人娘を嫁に取られて寂しいのは私だってそうですけどね、もう披露宴から三ヶ月も経っているんですよ？いつまでもそんなにクヨクヨしてたって仕方がないじゃないですか、お父さん？」

「まあ、そうなんだがな……」

「あの子は小さい頃から可愛いお嫁さんになるのが夢だったって言うてたじゃない？あなただって良く御存知の筈よ？その夢が叶ったんだから、あなたも少しは喜んであげて下さいな？」

「お父さんのお嫁さんになりたいって言うてたんだ、あんな男の嫁になりたいなんて言うてない」

「あらまあ往生際の悪い人ですこと、あの子が自分で選んだ男性な

んですから間違いないってありませんよ？真面目で優しいいい人じゃないですか、残念ですけどあなたの負けですよ」

「むづ……」

女房に諭されて箆笥の上にある写真立てに目をやると、そこには素敵な衣装を纏った君の姿が写っていた。その衣装の色は、このアルバムの中には無かった最も美しく眩い天然色。

「あの子、本当に綺麗な花嫁姿だったわね？白いウエディングドレスが良く似合って……」

七色の色は全て混ぜ合わせると白色へと変わる。これが答えだったんだ。君は七色の思い出を織り重ねて一人の女性へと成長して、最後にこの素敵で純白のドレスを身に纏ったんだね。

『お父さん、今まで本当にありがとう』

君のこの言葉で僕は夢から覚めた。でも、例え儚い夢だったとしても僕は君に出逢えた事を心から感謝している。

君の父親になれて良かった。君の初恋の相手になれて本当に良かった。こちらこそ、素敵で思い出をたくさん、本当にありがとう。

どうか世界で一番幸せな女性になってくれ。これが僕から君への最後の願い、最後の告白、最後の愛情だ。

そして、これが君との恋の最後の決別の言葉。君は僕の青春そのものだった。かけがえのないたくさんのおきめきを、本当に、本当にありがとう。

「しかし、あなたも懲りない人ですね？あの子が赤ちゃんを授かったと聞くと、まだ性別もわかってないのに勝手に女の子用のベビー服とおもちゃをプレゼントに買ってきちゃうんですから、もし男の

子だったらどうするおつもりですか？」

「いや、生まれてくる孫は絶対に女の子じゃなきゃ認めない、あの子の娘だからきつと可愛い女の子になるぞ？」

「あらまあ呆れた！今からこの調子じゃ先が思いやられますね、本当に困った恋多きおじいちゃんですこと……」

雨はいつの間にかすっきりと止み、雲の切れ目からは青空が覗いていた。そこに綺麗な七色の虹が掛り、笑顔でその橋をはしゃぎながら渡る君の姿が見えた気がした。

煎れたばかりのお茶が喉を通り体の中を駆け巡る。熱い。どうやら心は熱さを忘れてはいないようだ。今度はどんな素敵な思い出を作ろうか？僕の恋の炎はまだまだこれからも消えそうに無い。

完

No. 03 ありがとう、そろ

私が彼女と初めて会ったのは私が通う工場の広場、八月の焼けるような日差しが降り注ぐ中だった。

私と同じ黒のもんぺを穿き、小豆色の木綿に身を包んだ彼女は木製の朝礼台に座り、空を見上げながら歌を口ずさんでいた。

「こーこはお国の何百里……。チャラーラー」

どうやら続きを知らないらしい。私がそれに続いた。

「離れて遠き満州はー」

私の声を聞いた彼女は私を見るなり明るい笑顔を見せた。口の両端に笑窪が見える。

「ありがとう、続きを歌ってくれて」

私はすすで黒くなっている頬を少し赤らめて応えた。

「まあ私もあんまり知らないんだけど……。その歌好きなんだね」
彼女は表情を曇らせて首を横に振った。

「全然、ほんとは華やかなものを歌いたいんだけど、この非常時にそういうもの歌ったらどこから文句を言われるか分かったものじゃないわ。だから軍歌で我慢しているわけ」

四年前の冬から始まった戦争は私たちの生活から華やかさを奪っていた。横文字の言葉は敵国の言葉」とされ日本式にされたり、「贅沢は敵だ」と言っては質素な生活を押し付けられたり。それだけではなく最近は何々の食料を手に入れるのも一苦労だ。

街を行くみんなは「非常時、非常時」と言っ暗い表情を浮かべている。

それとは対照的にラジオからは勇ましい兵隊さんの活躍が日々聞こえているが、どうもうそ臭く聞こえる。

そんなみんなが沈んでいる生活を送っている中、空を見上げている彼女がなんだか新鮮に思えたのだ。

工場のほうから休憩の終わりを知らせる鐘の音が響いてきた。

「大変、そろそろ仕事に戻らないと班長に怒られるわ、あなたも戻らないと」

私が声をかけると、彼女は朝礼台から飛び降りて私の隣に並んだ。背は私より少し大きいところか。

「戻るけどさー、その前にあなたの名前を教えてくださいよ」

「え、私？ 私は中田安寿よ」

私の名前について人は時々「敵国人っぽい」と難癖をつける。

だから本当はあまり名乗りたくないのだけど、しょうがなく軍歌を歌う彼女なら平気な気がしたので、私は躊躇無く答えた。

「へー、安寿か。いい名前だね。私はそら。毛利そらよ。昨日からこの工場で働いているの」

そらは名乗ると笑顔で工場へ向かっていった。私も急いで彼女の後を追った。

次の日も彼女は朝礼台に座り空を眺めていた。今日も八月の暑い日ざしが降り注いでいる。

「そらー、休憩時間とはいえそんなに日差し浴びていたら日射病で倒れちゃつよ」

私が注意すると、彼女は私に視線を合わせず、空を見ながら答えた。

「このくらい暑さならかわいいものよ、どうってことないって」

ここで初めて私は彼女がいつも東の空を見ていることに気がついた。

「そらー、東の空に何かあるの？」

彼女の表情が少し暗くなったような気がした。

「うん……、ちよつとね」

休憩の終わりを知らせる鐘が広場に鳴り響いた。

翌日は朝から警戒警報が発令され、工場は休みかと思っただが、午前十時過ぎにはそれが解除された。私はそれを知ると家の防空壕か

ら出て工場へと向かった。

「そらも来ている。そらは私を見るなり

「今朝の警報、何も起こらなくてよかったね」

と、笑顔を浮かべて私の手を握った。

ひどく冷たい手。

「本当によかったね」

そらは心の底から喜んでいようだった。

それから一時間が過ぎて十一時の休憩時間。今日もそらは朝礼台に座って空を見ていた。今日は朝から霽もやがかかって視界が悪く、それが晴れた後でも空は厚い雲が覆っていた。ただし雲の中央には一筋の裂け目が走り青い色を覗かせている。

「そらー、今日も空の観察？」

「うん、私空を見るのすきだから」

いつもより彼女の声と笑顔に元気があのような気がした。今朝何も無かったのがほんとうに嬉しかったのだろう。

しかしその直後、彼女は顔を曇らせ咳いた。

「来る……、こっちへ来る……。やっぱりここが……」

そらは立ち上がるなり私に向かって叫んだ。

「みんなを呼んできて、そして防空壕ぼうくわうへ逃げて！」

「え？ だって警戒警報はもう解除されたんじゃない……」

「いいから！」

彼女の真剣な声に圧倒された私は広場にいる仲間に向かって大きく叫んだ。

「みんなー、防空壕へ逃げてー」

「早く、あいつが来る前に早く！」

「そらも叫ぶ。あいつって誰だ？ 聞いてみたいけどそんな暇は無さそうだ。」

みんな怪訝そうな顔をしながら防空壕へと入っていった。その様子を見たのか工場の中からも数名ほどが外へ出て防空壕へ向かう。

「こら！ お前らどこへ行くんだ！ 工場に戻って働かんか！」

いかにもたくましく体つきの班長が防空壕へ向かう女工たちを捕まえようと胴巻声を上げながら外へと飛び出してきたが逆にそらに捕まってしまった。

「班長、緊急事態です。防空壕に逃げてください！」

班長の太い腕をそらは力強く掴んだ。

「も、毛利！ 痛い、痛いって」

班長が痛がるなんてそらはどれだけの強さで掴んでいるのだろう。私は不思議でならない。

「早く、あいつが来る前に早く防空壕へ」

「ああ、分かった。なんだか分からないがお前の言うとおり防空壕へ行く。行くからこの腕からその冷たい手を離してくれないか。痛くてたまらん」

そらが手を離すと班長の腕にはくつきりと彼女の手のあとが残っていた。

そらに導かれるままに私と班長は防空壕へと向かう。

防空壕は工場の裏山にある。分厚い鉄製の扉を開けて数十メートル坂を下りていくと。人が三十人ほど座れる空間に出る。そこに私たちの班三十一人全員が座った。

「いいですか、私がいいと言うまで決して外に出ないで下さいね」

そらはそこに一人ひとりの顔を見ながら低い声で注意を促す。

「そら、さつきから『あいつ』とか『来る』とか言っているけど、いったい何なの？」

私が尋ねるとそらは「それは……」と頭を抱えた。

「詳しくは言えない。だって私もよくは知らないから……。だけどこれだけは言える。地獄だよ」

地獄？ その昔親戚の葬式でお寺に行ったとき地獄絵図を見たことがあるけど、その地獄なのかな？ その絵図には地獄の業火に焼かれる人々、赤い血の池で溺れる人々、針の山に苦しむ人々などが描かれていた。まさに地獄とはこのようなものなんだな、と私はその時思っただけ……。その地獄が現実のものとなるのだろうか？

「みんな耳をふさいで、姿勢を低くして。来る！来るよ！」
そらが激しい声を上げる。私はそれに従い耳をふさぎ、土の上に正座して背中を丸めた。みんなも同じ姿勢をする。

それから数秒後……。外から大きな激しい音が響いてきた。続いて激しい揺れが防空壕の私たちを襲った。

「な、なんだ？ 敵の空襲か？」

顔を上げて辺りを見回す班長の頭にパラパラと土が降り注ぐ。

揺れは十数秒ほど続き、やがて止まった。そして静寂がこの防空壕を支配する。かすかに遠くから聞こえる音を除いては。

「もう、出ても大丈夫かな……」

班の一人が頭に降った土を払う。

「もうしばらく待ったほうがいいんじゃない」

私が止めるとその子は立ち上がるうと浮かした腰を下げた。

それからどのくらいの時間が経ったのか分からない。外からは雨の音が聞こえてきた。

「あ、雨だ……」

雨の場合、上空を雲が覆っているため敵機も狙いを定めにくい。

もう安心だと思った誰かが立ち上がり、出口へと向かう。

それに続いて一人、また一人と立ち上がり、出口へと向かう坂を上っていく。座ったままの私の耳にやがて分厚い鉄製の扉が開かれる音が聞こえてきた。続いて聞こえてきたのは悲鳴。

「こ、工場が！ 燃えている！！」

私は仲間をよけながら坂を駆け上がり防空壕の外に出た。

燃えているのは工場だけではなかった。周りの家々、木々がすべて燃えていた。あるいは焼け爛れていた。辺りを燃やす火は雨が降り注いでもその勢いは止まらない。

灰色の雲から降り続ける雨。私は空を見上た。頬に雨が当たる。

その感触がいつもの雨とは違うような気がした。頬についた雨水を指で拭って見る。

「……！」

真つ黒な雨。何かの灰だろうか。灰が雨水と共にこの街に降り注いでいた。

「班長ー、『そら』の姿が見当たりませーん」

誰かの声には私はそらの存在を思い出した。

「何言っているんだー。うちの班には『そら』なんて者はいないぞー」

班長の声には私は驚いた。私は班長に詰め寄る。そらはさつき班長と話しをしていたではないか。

「『そら』はいないって、確かにさつきまで『そら』はいたじゃないですか。さつきほら、こうやって、班長の腕を……」

班長の腕からは先ほどそらがくつきりと残したはずの手のあとが消えていた。私は愕然として辺りを見回す。

「そらー、どこに行ったのー！」

黒い雨が降り注ぐ中、私は叫んだ。しかし何度叫んでもそらからの返事はない。彼女は忽然と姿を消してしまったのだ。

だけど私たちにはそらを探す時間が無かった。いやそれどころではなかった。なぜなら、そらの言う「地獄」がこの街を襲っていたのだから。

私たちは自分の身を守るだけで精一杯だった。その中で「地獄」の被害にあったであろう人を何人も見た。どの人も、かつて見た地獄絵図よりもひどい有様だった。

私たちの住む長崎ながさきを襲った「地獄」が何者であったのかを知ったのは、それから数年後のことである。

そらと出会ってから十年後。私は彼女と再会した。場所は広島ひろ市の平和記念資料館へいわきねんしりょうかん。

資料館の完成を祝うために長崎市民の代表として訪れた私は、そこで原子爆弾が落とされる直前と、落ちた後の広島の様子が映し出されている写真を鑑賞した。

その中に一枚の写真があった。

ひろしまけんさんぎょうしょうれいかん
広島県産業奨励館で働く人々

その写真の中にそらがいた。初めて私と会ったときの笑顔を見せて。口の両端に笑窪をくつきり浮かべて。

この奨励館は爆心地の近くにあったため建物は外枠を残して崩壊し、中にいた全員が原爆の熱線と爆風にやられ、即死だったという。瞬間的に私はそらがあの日　八月六日にこの奨励館にいたんだなと思った。あの日、雲ひとつ無い広島のを飛行機が一筋の線を描いた。そしてその線から原子爆弾が投下された。

そらと初めて会ったのがその翌日の八月七日である。そらは次に原子爆弾が落とされるのが長崎だと知り、一人でも多くの人を助けようとしたのかもしれない。私たちはそらに助けられたのだ。

そらがいた奨励館は今「原爆ドーム」と呼ばれている。周囲にある柵に手をかけてドームを除いてみる。ドームの瓦礫はその当時のままらしい。その瓦礫の中にそらが座っているのが見えた。彼女はもんぺ姿で空を見上げていた。

あれから十年　私はもんぺを脱いで上質の絹に身を纏っているけど、あの日で時間が止まった彼女の姿は変わらない。

「そらー、ありがとー！」

私はたまらずそらに向かって叫んだ。そらは私の声を聞くと振り向いてあの笑顔を見せてくれた。

久しぶりだね、安寿。元気だった？

その笑顔を見て互いに頷いた私たちは空を見上げた。目が痛くなるほどの青い空に飛行機が一筋の雲を描いている。

No.04 空の王女と大地の騎士

昔、ある国にとてもやさしくてきれいなお姫様がいたの。

そのお姫様は髪と瞳が水色で、とても心が広くて優しい人だったから、彼女は民衆から好かれ空の王女と呼ばれるようになったわ。

そんな空の王女には思い人がいたの。

王女の思い人は国の騎士で、それはそれは強くて聡明な人。

彼もまた騎士であるにもかかわらず、その人柄から民衆に好かれていたわ。

もちろん彼も王女が愛するように彼女を愛し、誠心誠意尽くしていたわ。

でも王族の掟では騎士と王女は絶対に結ばれることは無かったの。

二人がどんなに愛し合っていても、掟が彼らの仲を引き裂いていたわ。

そしていつしか彼のことを民衆はこう呼ぶようになったわ、大地の騎士と……

空とは絶対に結ばれることの無い大地の騎士ってね。

「お父様！ 私の騎士、ラテールをどこへやったのですか！」

「あやつなら、今ドラゴン退治をしているところじゃろう」

声を張り上げ、ルシエルは自分の父親であるニューアージユ王へ自分の騎士、ラテールの所在を言及した。

彼女の騎士ラテールはこの国最強の騎士であり、数多くの危険な任務をこなしてきたため、今日もまた王の命令で任務を遂行していると思われる、だがここ最近、彼がこの国最強の騎士だからとはいえあまりにもその数が多い。

そのため彼を慕っているルシエルは、ラテールの安否を気にして

いたのだ。

だが、そんなルシエルの感情などを無視し、王はそっけない態度で答えただけであった。

「ドラゴン退治って まさかお父様、彼を一人で行かせては
いませんわよね？」

「ふん、ドラゴンなど奴一人で十分じゃろ。それよりもルシエルい
い加減奴との仲はあきらめろ。でなければ奴が苦しむだけだぞ。そ
れじゃわしはこの後ジェリア候と会食があるのでな」

「そんな……」

以前は王もラテールの功績を称え優遇していた。だがルシエルと
の逢引の事実を知ると、彼に対し王は非常に冷たい人間となったの
だった。

現に今ラテールが行っている任務は、とても一人では行えない任
務であり、無謀とも言えるものであった。そんな危険で無謀な任務
を王はラテール一人に押し付けるようになったのだ。

もちろんルシエルはそんな王に反発して見せたが、王である父親
は彼女の言葉に耳を貸そうとはしなかった。

そしてラテールがドラゴン退治の任に就いて五日後、彼はぼろぼ
ろになりながらもその任務を全うし自分の主が住まう城へと戻って
きたのだった。

「親愛なるニューアージュ王、騎士ラテール、ドラゴン退治の任を終
え、ただいま戻りました」

「そっかご苦労。それでは次の任を与える」

ラテールが王の前で片膝をつき頭をたれながら、自分に任された任務を終えたことを王へと報告した。

本来ならば彼がしたことは偉業とも言うべき所業であったが、王の反応は非常に淡白なものであり、何事も無かったかのように、隣にいた大臣が持つ次の任務が書かれている用紙を受け取ると、彼に次の任務を与えようとしたのだった。

するとそれまでラテールの無事の帰還を、王の隣の席で心から喜んでいたルシエルであったが、王の態度に表情は一変し、焦りと懇願の表情を浮かべ王に進言したのだった。

「お待ちくださいお父様！ ラテールは先の戦いで怪我を負っています。もう少し日をおいて……」

「ならん！ これから言い渡す任は急用じゃ。しかもほかの奴にはできぬもの。それにラテールなら問題なくやってくれるわ。なあラテールよ、やってくれるな？」

「はっ仰せのままに」

ルシエルの進言を王は最後まで聞くことは無かった。

王はルシエルの言葉を遮り、ラテールへと話しを振ったのだ。

ラテールは王女であるルシエルの騎士であったとしても、王の言葉に反論することなどできるはずも無い。

彼は心配そうに見つめるルシエルを横目に、王から与えられた任務を承諾したのだった。

「ラテール！」

「心配しないでください。私は大丈夫ですから」

今にも泣きそうなるルシエルに彼は優しく微笑みかけ、王の下へと歩み寄り任務の書かれた用紙を受け取ると彼は王室を後にしたのだ。った。

そしてその夜、彼は次の任務の準備をしていると、本来こんなところでは聞くはずの無い声を耳にする。

「ラテール、いる？」

「姫様こんな夜分にどうしてここへ！」

ラテールは急いで部屋のドアを開けると、そこには黒いフードをかぶり闇にまぎれるような格好をしたルシエルがたたずんでいた。

彼女は慌てるラテールを、脇を通り抜け部屋に入るとフードを取り彼へと語りかけた。

「そんなことはどうでも良いわ。それよりラテールあなたは私の騎士でしょ？ 逃げて……私を連れて……」

「ルシエル姫！ 何を考えているのです！ そんなことをしたら私だけでなくあなたにも」

「お願い！ でなければこのままだとあなたが死んでしまうわ！ あなたのいない世界なんて私は生きてはいけない！」

歯切れの悪いラテールの言葉には、愛するものを心配する感情が込められていた。

どんな思いでルシエルがここへ来たのか彼はわかっていて。できることなら彼も彼女が言うように連れ去ってしまいたかった。

だがそんなことをすれば自分だけならまだしも、彼女まで傷つけてしまうかもしれないと思い彼は自分の気持ちを押し殺したのだ。

けれど泣きながらすぎる彼女にラテールはついに自分の感情に素直になる。

「ルシエル……わかった。そこまで君が言うのなら俺は君を連れ去ろう。おそらくつらい旅になるよ？」

「平気よ、あなたと一緒になら」

彼らは逃げた、身分、名誉、権威、それらすべてのものを捨て、自分の体と愛しているただ一人だけをつれて。

幾日も、幾日も彼らは逃げ続けた。

しかし、そんな生活は長くは続かなかった。

ルシエル姫の父親であるニューアージユ王が、国の総力をかけ彼らを探し出したのだ。

「ここか」

「はい、この小屋にルシエル姫と犯罪人ラテールがいると思われま
す」

「そうか、でははじめろ」

「はっ！」

「犯罪人ラテールよ！ 貴様が連れ去ったルシエル姫を連れ即刻出てまいれ」

一人の兵が王の命令に従い、海辺の小屋に向け声を張り上げた。

小屋の後ろには断崖絶壁で下は海、小屋の周りは百を超える兵で囲まれ、追い詰められたラテールとルシエルには、もはや逃げ道は

消えつせていた。

「……………」

小屋の中からは反応は無く、ただ沈黙が流れているだけであった。

「依然として動きは無いようですか？」

「突入じゃ、ラテールは殺してもかまわんがルシエルには一切傷をつけず捕らえよ」

「わかりました」

一度目を瞑り考えをめぐらせた王は兵へと命令を下した。

命令を受けた兵達は皆、剣を抜き放ち突入の準備にかかる。

そして、突入が決行されようとしたまさにその時、小屋の中から水色の髪のルシエル姫が外に出てきたのだった。

「お待ちくださいお父様！」

「おお！ 私のかわいいルシエル。さあこちらにおいで」

ルシエルの姿を確認すると王はそれはたいそう喜んだ。

だが王の喜びとは裏腹にルシエルの表情は厳しい。

彼女は毅然とした態度で、王へと一言だけ告げた。

「それはできません」

「なぜじゃ！ お前も王族！ なぜそれを捨ててまでそのような男

へとついでいく！」

「お父様、民が私たちのことをなんと呼んでいるかご存知ですか？」

怒鳴り声にも近い声でルシエルへと尋ねる王に対し逆に彼女は王へと質問をぶつけたのであった。それはこの国のものなら誰でも知っている、そう誰でも知っている自分たちのことについて。

「ん！？ 空の王女と大地の騎士だったかの。決して結ばれぬがゆえにつけられた名だと思ったが、それがどうかしたか？」

「私も最初にその名を聞いた時は、愕然としました。民達にも私たちは決して結ばれることは無いのだと思われているとわかって」

そう、彼女達は決して結ばれることの無い、空と大地の二つ名で呼ばれるようになっていたのだ。

そのことを確認するように質問をぶつけたルシエルは悲しい表情を浮かべ、王の答えを肯定する。

「そうじゃ、お前達は消して結ばれることは無い。だから、さあ早くこちらにおいで」

王は王女の質問が、やっと自分の間違いに気づいてくれたのだと思った。

けれどそれは違っていた。

王女の質問は王が思ったように、自分が間違っていたというものではなかった。

「でもお父様、私たちは見つけたんです。空と大地が結ばれているところを」

「な、なんじゃと!」

「ほら見てください。あそこなら空と大地が交わっているでしょ？
ですから私たちもあそこに行こうと思います」

ルシエルは海の彼方を指差した。

そう彼女が指差したのは水平線であった。

「まさか……よせ! ルシエルお前は何をしようとしているのじゃ
!」

「お父様、もうお別れです。私たちはもう行きますわ。今まで育て
てくれたご恩は忘れません」

彼女はこれでお話しは終わりですとばかりに、最後の笑顔を王へ
と向けると、いつの間にかルシエルの脇へと来ていたラテールにつ
れられ、小屋の裏の崖へと歩みを進めていった。

王はその様子を見てはつと気がつく。彼女達が何をしようとして
いるのかを。

「待て、ルシエル! ルシエル!!」

王は叫んだ、心のそこから、今までで一番の声を張り上げて。

しかし彼女達は王の言葉を振り切ると、肩を寄せ合いながら海へ
と身を投じたのだった。

「それでそれで! お姫様と騎士はどうなったの!? まさか死ん
じゃったの?」

一人の男の子が目をきらきらさせて、母親へと話の続きをせがん

でいる。

母親もそれに答えるように、話の続きを聞かせるのだった。

「ううん、お姫様と騎士は死んではいないわ。お姫様たちは王様の目を欺くためにわざと海に飛び込んだの」

「それでそれで！」

「それでね、海に落ちた後はあらかじめ掘っておいた横穴に隠れて、やり過ごしたのよ」

「へ〜〜」

「お姫様は水平線を指差してあんなこと言ってたけど、あそこは海と空が交わっているところだから大地と交わっていないでしょ？だからお姫様たちは大地と空が交わる部分、地平線を目指して旅をしたの。そしてついにお姫様たちは地平線にたどりつき平和に暮らしましたとさ。これで今日のお話は終わりよ」

母親は男の子にそうつげると、夕食の準備に取り掛かるためエプロンをして台所へと向かっていく。

そんな母親の後姿を見ながら、男の子は一つ尋ねた。

「それじゃお姫様たちは幸せになったのかな？」

「ええ幸せになったわ。だってお姫様はその後騎士と結婚して、一人の元気な男の子を授かったから」

周りには何も無く空だけが見つめている一軒家には、今日も明るい声がこだまするのであった。

秋。

それは、青々しい葉が少しずつ色あせる時期。

栗やサンマなどが食べ頃で、冬の寒さを肌で感じ始める。

服屋では半そでの類たぐいから、長そでの物に入れ替え。電気屋では扇風機に代わり、ストーブが店頭に並び始める季節だ。

勿論、山々に囲まれた、小さな町や村でも同じ事。

しかし、田舎町では微小ながらも過疎化が進み、人が減っていく。少子化の影響もあるが、若者達は羽を伸ばすために都会へと立ち、更に人は減る。残るのは年老いた者や、進んでその町に居ついた変わり者だけであり、小さな町はまた小さくなっていく。

この物語はそんな小さな町で起こる、小さな、小さなお話し。

自由な野良猫

都会とは反対に煌びやかな物がない田舎。緑溢れ、畑が広がるこの地に、ちよこんと佇む小さなうどん屋があった。

他に建物が無いわけではないが、家と家の距離が多少あり、置き去りにされた印象を持つ店である。

一軒家を改築して店を開いており、正面から見ればうどん屋、裏から見れば完全な二階建ての家となっていた。

壁の至る所が変色し、少しでも栄えている街で暮らす人間であれば、かなりの確率でボロ家と呼び、その家を哀れむ様な目で見るとは、ずだ。

だが、その店の裏に取り付けられた縁側に正座をしている老人の表情は、それを完全に否定していた。

年老い過ぎたため、顔中皺だらけではあるが、朗らかな表情を浮かべ、湯呑を優しく手で包み込むその様子はどこか幸せそうである。

ゆつたりとした時間を漂わせながら、老人は細くなった眼で目の前の地面にいる真っ白な猫を見つめ、かすれそうでありながらしっかりとした声で呟く。

「シロや、隣の美弥みやさんがくれたサンマはおいしいかい？」

その声を聞きつつ、器用に前足で頭と尾を抑え、魚を食べ続ける猫に老人はうんうんと、微笑みながら頷く。

答えが返ってくる事に期待していたわけではなく、返事を待っていたのでもない。

ただ老人は、シロと呼んだ猫が満足している。それだけで嬉しいのだ。

町から人が居なくなろうが、古びた家に住もうが、人生を賭けたうどんとこの猫が喜ぶ姿さえあれば、老人は十分であった。

「お〜い。じいちゃん、うどん食いに来たぞ〜」

店の方から響く男性の声。耳が遠くなった老人にも、はっきりと聞こえる元気の良い声は、毎日聞く常連のモノだ。

老人はそれを聞き、ゆつくりと湯呑を自分の隣に置いた。

「もうそんな時間になったのか。年を取ると、時間の進みが早いのに」

一日一度は口にする口癖を呟いた後、老人は昔より幾分か重くなつた腰を上げ、しつかりと二本足で立ち上がった。

毎日欠かさずうどんを作ってきた賜物たまもので、実際の年齢より足腰が強い。麵を作る時に行う生地を踏む動作が、老人の強じんな足腰を生み出したのだ。

杖要らずの老人はこの場を立ち去る時、シロに話しかけるのが日課である。

「シロ、わしは店に出てくるよ。お前も来たかったら後でおいで」

老人の言葉を聞いたシロは食べる口を止め、魚まみれになった顔を上げた後、可愛い鳴き声を発した。

シロは老人の言葉の意味など分かつてはいない。ただ、毎日同じように語り掛けては、店に行く老人に返事をするのが、シロにとつての日課となっていたのだ。

いつの間にか出来た、一人と一匹の短い挨拶である。

老人はシロの返事に再び頷き、ジツと自分を見続けている猫を見つめ返す。

誰も毛づくろいしていないはずが、常に整ったフワフワの白い体毛。その事でシロ自身がきれい好きな猫だと想像させた。

そして、サファイヤを連想させるような青く大きな瞳。不思議な透明感も合わさり、どんな宝石よりも美しい、と老人はいつも思っている。

「そんなにきれいな目ん玉をしとるんだから、鼻の周りもきれいにしておかんといかんぞ?」

魚の身や油ですつかりと汚れてしまったシロの口周りを見て、老人は呟く。

シロも気にしていたのか、前足で顔をこすり、それを舐めるといふ動作を始める。

しかし、前足も顔同様に脂だらけであったため、被害を拡散させるだけであった。

その様子を見た老人は、はははっと笑い、ようやく店へと足を進め出す。

「おまたせ。しょう油うどんだよ」

老人はそう言って先ほど声を上げていた 頭にタオルを巻いている三十代半ばの 男性の前に、うどんの入ったどんぶりを置いた。

土色をしたどんぶりは普通のより少々大きめで、二人前くらい余裕で入るほどだ。

少しいびつな形をしたそれは、この町にいる陶芸職人の作品である。

職人と老人は、古くからの知り合いであり、店を開く記念に渡されたどんぶり。数十年前の物にも関わらず、今でも使用出来るのは、職人の腕が良かった事と老人の丁寧な扱いが長生きさせているのだらう。

秋の季節に合った紅葉の模様も、風流を感じさせる。

ここにはないが、春を連想させる桜、夏に涼しさを与えてくれる風鈴、冬の醍醐味である雪だるま。それぞれの季節に合わせた模様の焼き物が、数点ずつこの店にあり、季節の変わり目を知らせる店と常連の間では広まっていた。

それは老人の目の前にいる、浅黒く日焼けをした男性も知っており、うどんの味もさる事ながら名物の一つとなっている。

「おつ、朝が少し寒くなってきたかと思えばもう秋か。早いもんだなあ、じいちゃん」

「ほんとだね。そう言えば、今度こたつを出したいのだけど、幸人君。手伝ってはくれんか？」

「おう、いつでも呼んでくれよ。こんなウマいうどん作ってくれるじいちゃんの頼みだ。オレに出来る事なら何でもしてやるさ」

「はっはっは、頼もしいね。じゃあ、明日にでもお願いしようかな」

任せとけ、と言いつつ、幸人と呼ばれた男性は力強く、筋肉の発達した胸を叩く。だが、少し強くやり過ぎたのか、情けなさそうに自ら痛めた部位をさすった。

老人は、そんな彼の行動をニコニコしながら眺めつつ、近くにあったしょう油瓶を手に取る。

「はい、しょう油」

「おつ、悪いな。そんな事させちまって」

「いやいや、大事なお客さんだからね。これぐらいはするよ」

笑顔を絶やす事もなく老人はそう言い、しょう油を幸人に渡した。礼を云いつつ受け取った彼は、中に入っているモノをためらわずうどんにかけ始める。

どんぶりの中に入っていたうどんには、汁が入っていないためだ。入っているのは、光に反射し、つやつやと輝くコシの入った太麺と、その上に小さな山を築く大根おろしと天かす。それらを包み込むように、出汁をたっぷりとしみ込んだ油揚げが乗っているのみであった。

そこにしょう油を垂らし、食べるうどん。それがしょう油うどん

である。

どんぶりの大きさに見合って、多めに入っている麺達をしょう油と絡ませる様に混ぜ合わせ、幸人は大きな口を更に大きく広げた。

「んじゃ、いっただつきまゝす」

箸で、これでもかと言うほどの量の麺を掴み、一気に口に運ぶ。少し寒い季節にはなったものの、流石に昼間はそれ程ではなく、むしろ暑い日すらある。そのため、幸人は冷たいしょう油うどんを注文し、麺の熱さで食べる速度が緩む事もなくどんぶりの中を制覇していった。

気持ちの良い音を立てて食べ続ける男性に、老人は嬉しく思いつつも、少し表情を険しくさせる。

「……幸人君、作ったわしが言うのも変な話だけど、もつと栄養のある物を摂らないといけないよ。奥さんだって、心配していると思うな」

「翠みどりなら平気だって。秀人ひでとのおしめが取れるまではあまり迷惑掛らんねえしさ」

「確かに、赤ちゃんのお世話は大変だけど、それで幸人君の身体を壊したら元も子もないよ」

いつも優しい雰囲気の老人が、暗い顔で幸人を諭す。

周りのみんなにも気を使わないといけないけど、それ以上に自分を大切にしないと。

そう言う老人の言葉に、幸人は少しばかり言葉を詰まらせた。

他人を心から心配する老人。その表情を再度見た彼は、諦めたかのようにため息を吐き、後頭部を掻いた。

「……はあ、分かった。なら、明日から三日にいったんは自分で弁

当作るようにする。だけど、これ以上は譲れないからな。じいちゃんのうちんはオレの生きがいなんだからよ」

そう言つて真剣な顔をした幸人。老人はそんな彼に、大げさな、と呟きながら苦笑する。

苦笑とは言え、老人に笑顔が戻った事で、幸人は自然と嬉しくなり、ニカツと白い歯を見せ、笑った。

すると、笑い合う二人に近づくモノがいた。

老人よりも先にその事に気付いた幸人は、そのモノを手招きして呼んだ。

「シロ、お前もこっち来いよ」

幸人の言葉に反応し、老人も彼の視線を追う。

そこで目にしたのは、魚の脂が顔全体に広がり、ワックスを付けたかのように毛がボサボサと跳ねているシロであった。

無駄にテカテカしている猫を見た老人は、少しばかり呆れつつも、いつもの笑みを浮かべる。

「まったくお前は、きれい好きなのも良いけど、少しは状況を考えて行動しないといけないぞ。やり過ぎも禁物」

そう言った老人は、近くにあつたティッシュを数枚手に取り、割れ物を扱うようにしながらシロの顔を拭く。

猫はその行為が気持ち良いのか、目を細め、次第に寝そべってしまつた。

「呑気な野良猫だな。じいちゃんがいるから食い場にも困らねえし。のんびり出来て羨ましい限りだぜ」

「わしもそう思うよ。尤も、こんなシロが大好きなんだけどね」

「そりゃ〜、オレもだ」

幸人の軽快な笑い声をBGMに、きれいになったシロを老人は優しくなでる。

顔を拭かれる事と食事後で腹が膨れた事が合わさり、満足そうなシロはとても静かな寝息を立て始めた。

飼い猫ではないシロ。老人が一年前、妻を亡くした時にヒョコつと現れた子猫に、餌を与え始めたのがきっかけでここに居つき始めた野良猫。そんなシロが老人の下に辿り着いたのは幸運だったと言える。

老人も大事な人を亡くした寂しさを紛らわすための行為であった。都会にいる息子夫婦からの誘いを断り、この地に残り続けていても消える事がない悲しみ。そんな辛さから早く逃れようと足掻いた結果が、目の前にいるグータラな猫との付き合いとなったのだ。

だが、それも昔の話し。今では老人にとって、かけがえの無い大切な家族となっていた。

年からするとひ孫かな、と思い老人は小さく笑った後、シロから手を離す。

「そう言えば幸人君。美弥さんがサンマをくれたのだけど、君もいるかい？」

「貰えるんなら貰うけど、良いのか？」

「少しばかり多く貰っちゃってね。わしとシロだけじゃ食べきれそうもないのだよ。じゃあ持ってくるから、ゆっくりして行ってね」「いいって、後でオレが取りに行くから。じいちゃんもこいつみたいに休んどけって」

幸人はそう言って寝転がるシロに向かい顎をしゃくる。

寝相は良くないようで、不規則に転がる白い猫に対し、老人は困ったような笑みを浮かべつつ、幸人に向い口を開いた。

「シロは夢の中で何かと闘っているみたいだから、わしも動かないといけないよ」

「相手がネズミだったら笑えるけどな」

幸人の言葉に、そうかもしれないと思いつつ、老人は店の出入り口のドアを開けた。

薄暗い室内に居たため、真っ先に飛び込んできた日の光に老人の目が眩み、右手を薄くなった眉毛に当て、敬礼に近いポーズで光を遮る。

明るい太陽の下、進む度に目が慣れてきた老人は、ふと空を見上げた。

幾つか漂う大きな雲。その遙か先にある青い空。

老人は、そんな空を見て、不思議とシロを思い浮かべた。

自由気ままに流れる白い雲は、色もそうだがシロに似ている。なにより、空の色を見ると、シロの青い瞳を思い出す。

無邪気で、それでいて変なところは素直な野良猫の瞳。

寒くなり始め、澄み出した空は水色でありながら奥が深く、まさにそっくりだと老人は思った。

「ははっ、親馬鹿ここに極まり、か。いや、ひい爺馬鹿だった」

そう呟き、老人はサンマを取りに足を進める。

いつも以上に軽い足取りで進む老人は、少し先の事を考えた。

こたつが出たらシロと一緒に丸くなろう。

雪が降ったらシロと足跡を作ろう。

春になったら縁側で一緒に眺めよう。
シロそっくりの、きれいで自由な青空を……

あの日、あの時、あの場所で見た世界一美しい空のことは一生忘れない。

いや、忘れたくても忘れられないと言ったほうが正しいのだろうか。

なぜなら、今までに見たことも無いぐらい美しくて、脳裏にやきつく景色は、私と友人達の人生を大きく狂わしてしまったからに違いなかったからだ。

それは、悪魔が私達の魂と引き換えに見せてくれた最初で最後の絶景だったのかも知れない……

1954年当時の私は海をこよなく愛する青年だった。

その頃の私は、朝から晩まで、暇を見つけては地元のサンタモニカの海岸で友人達と一緒に時間を忘れてサーフィンに没頭する毎日であった。

そんな楽しい日々を過ごしていた夏の終わりに、ある白人の男に私と友人達は浜辺で出くわしたのだった。

『兄ちゃんたち、楽な仕事してみないか?』

そう言つて、男は私たちに声をかけてきた。

『楽な仕事つてなんだよ? ヤクの運び屋だったらお断りだぜ!』
私達の中で一番血気盛んなマーカスがおっさんに詰め寄って聞いた。

『そんな危ない話こんなところするもんかい。ちょっとした軽作業するだけでヤクの密売くらい高給を貰えるっておいしい話なんだけどな……』

半パンツに無知のシャツというラフな出で立ちをした男は、人懐っこい笑顔でそう言った。

『まあ。話だけでも聞いても損はないと思うよ、兄ちゃんたち。立ち話もなんだから、そのレストハウスにでも行って、うまいもん食いながらも、おじさんの話でも詳しく聞いてみないかい。もちろん飯代はおじさんが派手に奢るよ』

男は、口元を緩めて二カつと笑みを浮かべると、任せておけと言わんばかりに胸を二、三度叩いて私達を誘ってきた。私は男の目が笑っていないのに違和感を感じたが、マーカスともう一人の友人のトムはすっかり男に心を奪われてしまっていた。

『おっさん、奢ってくれるのだったら、話だけでも聞かぜ』

お調子者のトムが飯に釣られて勝手に決めていた。

『じゃ、兄ちゃんたち。うまいもんでも食いに行くか』

マーカスとトムは、男の隣に立って、一緒にレストハウス目指して歩き出した。

私は男に胡散臭さを感じていたので行くのを躊躇していたのだが、なかなか一緒に来ない私を見かねてマーカスが叫んだ。

『ロバート早く来いよ！ お前の分まで食っちゃまうぞ』

気がつくくと、私は砂浜に足をとられながらも小走りで仲間たちの元に駆け寄っていた。

レストハウスに入ると、男は私達に約束した通りに飲食物を派手に注文した。

『兄ちゃんたち、まずはビールで乾杯としようじゃないか』

金髪で水着姿のウエイトレスが、ジョッキに並々とつがれた黄色い液体をウッドテーブルに置いていった。

各々に、程よく泡立ったジョッキを片手に持つと男の合図で乾杯した。

『運命的な今日の出会いを祝して・・・』

軽くレストハウス内にジョッキの硝子があたる音が響いた。

乾杯をした後に、肉の焼ける美味そうな匂いが鼻を刺激すると、テーブルにステーキが並べられた。

『遠慮なく食べてくれ』

私達は腹も減っていたので、遠慮などするはずもなく、がつつきながら肉を胃袋につめこんだ。

男は、ニコニコと私達の食べっぷりを見ながら、ビールのお代わりを次々と注文していった。

不思議な事に、男は私達をレストハウスに誘っておきながら、なかなか本題の仕事を切り出さなかった。ただ、ビールを私達が飲み干すと、どんどん追加で注文して『さあ、飲んで、飲んで』と勧めるばかりだった。私達は、そんなわけで、気がつくときつかりほろ酔い気分になってしまっていた。

そんな、私達の状態を待っていたかのように、男は割りのいい仕事の話をしだした。

『君達は愛国心つてもものがあるかい？』

突然、男は唐突に真面目な顔をして話し始めた。

『はあ？ なにを言い出すんだよ、おっさん！』

一番酔いが回っているだろうマークスが男に絡んだ。

男は、マークスのことなど無視するかのようには話を進める。

『実は、おじさんのこれから話す、おいしい仕事つてのは、国のためになることなんだ。しかも、海外にも行けて給料もいいときてる』
『おっさん、海外に行けるって本当か？』

トムは目を輝かせて男に聞いた。

『ああ、もちろん本当だよ。南の楽園で仕事をしてもらうのだけどももちろん休みの日はサーフィンし放題だよ』

男は、私達の興味のあることのツボを心得ていた。

『で・・・その楽園での仕事って具体的に何するんだよ』

私は、はつきり要点を言わない男にいらいらして聞いた。

『仕事っていうほどのものでもないんだがな、楽園に行つて、穴を掘るんだよ、具体的に言つと壕を掘る仕事をしてもらうだけだ。ど

うだ？ 簡単な仕事だろ。穴掘りなんかは、うまくやりゃ、半日もかからない仕事だぜ。それで月収500ドル貰えるんだぞ。いい話だとおじさん思っただけだな』

『おっさん、本当に穴掘りだけで、そんなに貰えるのか？』

『マークスが信じられないといった顔で男に確認した。』

『もちろん本当だよ。あとは、この書類にサインしてくれたら、労働契約成立って運びになる。ああ、そうそう、もし今すぐにサインしてくれたら、特別に100ドルを支度金として即金で君達に渡すことが出来るのだけだな・・・100ドルあったら、新しいサーフボード買ってもお釣りがくるんじゃないの』

男は、いつのまにかウツドテーパーブルの上に契約書なる書類を広げて、サインするように誘ってきた。

私達、三人は、書類を詳しく読みもしないままにサインをした。た。

『君達が聞きわけがよくて利口なのでおじさん助かったよ！ じゃ、これ約束の金だよ』

男は、私達がサインした書類の横に新札のドル紙幣を置くと、一緒に名刺を置いた。

『申し遅れたが、おじさんはここで働いているんだ』

名刺には、国防総省と書かれていて、名詞の中央に刻まれた鷲が誇らしげに私達を見つめていた。

サンタモニカの海岸で国防省の男と出会ってから、三ヶ月後には私達はマーシャル諸島の洋上を航行する空母の甲板にいた。空母の目的地はマーシャル諸島にあるビキニ環礁地帯にあった。なんでも、新型爆弾の投下実験をするとの事で、キャッスル作戦という大袈裟な名前までつけられているものだった。でも、そのような作戦名までつけられているにも関わらず、私達には作戦の具体的な説明は一切なされてはいなかった。

所属の上官に聞いても『お前達は英雄になるために、ここに来たんだ！ただ粛々と歴史の目撃者になるだけだ』と抽象的な事しか言ってくれなかった。

でも、その時の私達は、新型爆弾の投下実験なんて全く興味のない事柄であった。興味があるのは空母の甲板の下に広がるエメラルドグリーンの海だけであってして、その海でサーフィンをして遊ぶことしか頭になかった。

最初、軍隊に入隊させられた時は、国防省の男に騙されたと酷く後悔したものだったが、男の言ったことは、まんざら嘘でもなく、仕事らしい仕事はほとんどしなくて、普通に働くよりは何倍もの給金が私達には支払われていた。しかも、空母から見えるマーシャル諸島近辺は、サンタモニカと比べ物にならないぐらいに美しく、時々、空母の周りをイルカの群れがドルフィンダイブをして私達を歓迎してくれたのだった。

そんな、何をするともなく、ただ海だけを眺めていたある日のこと。

私達は上官に呼ばれて、仕事らしいことを言われた。

『明日、諸君達はビキニ島に揚陸船に乗って行ってもらい、そこで来るべき投下テストに備え壕を掘って待機してもらおう。投下実験は三日後にとり行われるため、仕事が早く完了すれば、実験までの間は休暇にあてればいいだろう』

私達は上官の指令を聞いて飛び上がりそうに嬉しかった。それは、穴さえ掘れば、待ちに待った休暇が貰えてサーフィンを存分に楽しめるからだった。

次の日に、私達を含めた二百人ばかりの兵士達は揚陸船に乗って、ビキニ島におりたつた。

ビキニ島につくと、指定された場所に壕を掘る作業をした。作業はラッキーな事に半日もしないままに終了して、夕方からは、念願

のサーフィンに時間を当てることが出来た。正に楽園での休暇を満喫することが出来たのであった。サーフィンが終わると、浜辺で軍から支給された物資で盛大なバーベキューをして仲間達と楽しんだ。そんな、最高の時は投下実験の日まで続いた。

投下実験まで10分前になった時、私とマークとトムは投下予定ポイントから50キロは離れた壕の中で待機していた。

私達の前後には100メートル間隔で同じような境遇の仲間達が緊張しながらテストを待っている。投下三分前になると、上空を爆音を立てながら、B-29と呼ばれている爆撃機が飛んでいくのが見えた。ほどなくすると、遙か後方の飛行場からけたたましいサイレンの音が鳴り響き、実験開始の合図がなされたのだった。

私達は、支給された望遠鏡でB-29の姿を追った。B-29のぼてつとした格納庫が開くのが望遠鏡で確認すると、誰かが「サングラスをつけると叫んでいた」

私達が慌てて、サングラスをかけた瞬間に、遙か前方から、激しい閃光が走った。閃光の後、海がぽっかりと穴が開いたように見え、すぐに巨大な水柱が上空を飛んでるB-29にかかってしまふかと思つぐらい舞い上がった。まるで、この世の終わりかと思つぐらいの地響きが耳をつんざき、数秒後には熱風が私達の頬を伝わっていた。熱風はまるで、頬を焼き尽くすかのように熱い。

私はあまりの熱さのために、壕の中に頭を隠した。どれくらい、壕の顔をつ突つ込んでいたか分からないが、次に顔を上げた時には、爆弾が投下されたところの海上には、超巨大なマッシュルームの形をした雲がニョキニョキとのぼりたっていた。海面にも同じように雲が映っていて、どちらが上下なのか錯覚を覚えるほどのものだった。遙か50キロは離れているのにも、爆風によって舞い上がった水柱が熱風によって水蒸気となり、雨となって私達に降り注いだ。

私は閃光が収まったのでサングラスを外した。

サングラスを外した先には、見たこともない幻想的な景色がピキ二環礁を包みこんでいたのだった。

それは、投下ポイントから、私達の壕まで、空一面に広がる無数の虹であった。一つや二つの虹なんかじゃない。数百、いや数千の虹が大小様々に点在しており、その虹を見た全ての者の心を奪った。まさに、楽園にふさわしい見るものの魂を奪い去る光景だったのだ。

虹の余韻が残る中、投下実験終了を告げるサイレンが鳴ったのは、それから数分後のことである。

その美しい虹を見た、次の日にマーカスの体に異変が現れた。いや、マーカスだけではない、トムや私や壕の中でテストを体感したもののほとんど全員が程度の大小はあれど、体に不調をきたしたのだった。それは、あの景色を見た見物料を取るかのように、私達に代償を求めるものだった。

特にマーカスの状態は悪くて、顔は紅潮して、綺麗にパーマのかかった髪の毛が全て抜け落ちた。手足もなぜだか分からないが、野球のグローブのようにパンパンに腫れあがってしまい、その日のうちにうわ言を言いながら死んでしまった。

基地にいた軍医はマーカスのように死んでいく仲間をなんとかしようと、無線で本部に連絡していた。

しばらくすると、宇宙服をきたような兵士達が何人もやってきて私達の体に変な音のする器機をあてて、振り切った針の数値をノートに記入するばかりであった。

私は、『何があったのか？』と軍医に聞いてみたが、彼はただ首を横にふるだけであった。

それから、数年後には、私は軍を退役していた。

正確に言つと、働けなくなったという方が正しいだろう。

軍からは、生活に困らない程度の金は貰ったが、その代わり、もうサーフィンは出来ない体になってしまった。もう私には、腕も足もないからだ。

私は、たまたま四肢を失うだけで虹の代償を支払う事が出来たが、友人のトムは全身ガン細胞に侵されて命を代償に持っていかれ、もうこの世にいない。

友人達を失った私に残されたものは、あの楽園で見た脳裡に焼きついて離れない虹だけなのかもしれない・・・

体に強い風が当たった。

目の前で電車が駆け抜けた。

そんなこと当たり前だ。

だって踏切の前だもの。

ああ、そうか。

最近はずでの移動が多かったからこんな風さえ感じなかったんだな。

黄色と黒の棒が世界を隔てる。

赤に点滅する矢印、鳴りやまぬサイレン。

ああ、もう日が沈む。

あと十分もすれば闇の世界がやってくる。

うーん。

ああ。

ふう……長い。

いつまで待たせるんだ。

いつまで俺をこの位置にとどまらせるんだ。

向こう側に自らが進む道は見えているというのに。

コンビニへと続くドリームロード。

この目にはしっかりと映っているのに決して届かない向こう側。

ああ、なんて文学的。

なんて言ってる場合じゃない。

がしかした。

考えてみると俺はこの空虚な時間に対する怒りを誰にぶつけられればいいのだ。

さつき鳴り始めた時に渡っちまっておけばよかったんだ。

しかし筋肉痛のこの足でのダッシュは荷が重すぎた。

ちくしょう。

それにしてもこんなにも何もすることがないことがあるのか。
こんなに豊潤な時代にすごしていて。

ああ、わかっているよ。

携帯の電源が切れてしまったからこんなにも退屈なんだ。

いや、そんなに女子高生ほどは使わないよ。

ちよっとニユースのトピックスとか見たりさあ、できるじゃんか。
うん、手持無沙汰ってこういうことを言うんだな。

百科事典に手持無沙汰のページがあったら今のこの俺を掲載して
ほしいよ。

……危ない。

体の血が一瞬で引いたような気がした。

踏切の向こう側で母親と並んでいた幼児が踏切をくぐろうとして
いるじゃないか。

そしてその母親はママ友と談笑して右を見ているが、その左側で
よちよちと歩き出しているぞ。

おい、マジでやばいって。

電車来るって。

気づけ、気づけ、気づけ。

……気づいた。

またも強い風。

こんなに大きい音だったんだな、電車が通り過ぎる時って。

ああ、でも良かった。

こんなスリルほしくありません。

なかなかこどもは目が離せないよな。

親になったことないけど。

おれもこんなくらしいの時はさんざん迷惑かけたんだろっつな。

ああ、こんどは泣き出したよ。

母親が抱きかかえてるよ。

踏切の音でその子の泣く声は聞こえないけど、ありゃ相当の音量だろうな。

やっぱ母親は大変だ。

それにしても長いな。

ほら、沈み始めたよ。

踏切待っている間にロマンチックな夕景の一部始終を拝めそうだよ、全然うれしくないけど。

ああ、イライラする。

ねえ、おばさん。と声をかけたくなるくらい、おれの隣の車に乗っているおばさんは顔がイライラしている。

そしてハンドルを握った手の指でリズムをとっている。

わかりやすい描写。

まだいいじゃないですか。

そっちにはラジオなりテレビなり付いているでしょう。

そして車内だから空調もオツケーじゃないか。

……なんか寒くなってきた。

この頃太陽の有無での温度差が激しすぎる。

今まで俺の快適温度を保っていたおひさまが沈んでいるのだから当然だ。

やっぱり何かひっかけてくれば良かったけど出る前は暑いくらいだったんだ。

そして俺はいつまでここにいるんだ。

渡りたい、今までかかってこんなにも踏切を渡りたいと強く願った人物がいただろうか。上がれ、遮断機よ、上がれ。

……強い風。

また一つ通り過ぎましたと。

なのに矢印は両方点滅している。

いやいや、知っていますよ。

ここが開かずの何とやらだっことは。もつとすごいところがあるらしいから準開かずの踏切っことは知っている。

がしかし、こんなにも長いものなのか。そもそも俺はどうして踏切を渡るんだ。なんか理由すら分からなくなってきた。そうだ、そうだ。

コンビニにビールを買いに行くんだよ。仕事から帰ってあると思っていた冷蔵庫のビールがなかったんだよね。

この落胆のひどいこと。夏は過ぎたといえ、やっぱり仕事帰りのいっばいは準備しておきたいもんですよ。

仕方なく適当に着替えて今、ここですよ。危うくビール買うことより踏切渡ることが第一目標みたいになっただよ。

あ、でも踏切渡らないとコンビニ行けないからそれで合ってるのか。

もうどうでもいいよ、そんな理屈。やばい、退屈すぎて脳内がどうでもいいことを考え出したぞ。いかにいかに。

そもそもだよ、奥さんとか彼女とかいればさあ、ビール冷やしといてみたいなことを言えたわけだよ。

でも独り暮らしじゃなか、俺。なんか寂しさもプラスされてきた。

踏切で待つってあんまりいいことないなあ。レントゲン一回分くらい寿命が縮みそう。横でいきなりアクセルの音が聞こえた。さっきのおばさんだ。

ついにしびれ切らしたんだバックして引き返したよ。

どこか別の方面から回るんだろつなあ。

ここから行けば少し遠周りになるけど高架下の道路があるからなあ。

でそうやって遠回りしたとたん、この遮断機が上がったりするんだよなあ。

……甘かった。

まだまだかかりそうだ。

はい、強い風。

もう日も半分くらい沈んだよ。

お空も暗くなり始めてるよ。

……うわ、すごくきれいだ。

今日は天気良かったのか夕焼けがめちゃくちゃきれいじゃないか。

西日がぼっかり浮かんだ雲に反射して一枚の芸術を見ているようだ。

空には茜色と薄い青、雲の影が薄くグレーに映って素晴らしい景色だ。

写真とっておこう。

携帯、携帯……そうそう、そうだったね。

電源切れた携帯ってなんの役に立つんだよ。

プラス思考に行こう。

ここで踏切に引っかけたからこそこんな素敵な空を見ることができんだ。

目を正面に戻す。

こどもが泣きやんでいる。

母親はこどもを抱えたまま、まだママ友と談笑している。

よくそんなに話すことがあるんだなあ、俺もかなり自問自答してるけど。

アクセルの音。

さっきのとは別の車がおれの横にとまる。

今度は男だ。

まだ表情は余裕だ。

なんだか腹が立つ。

この遮断機が上がればみんな一斉にわたる。

俺はこんなに待っているのにこの車と同じタイミングでここを渡るのだ。

おれの今までの苦労はなんだったんだ。

リタイア者（おひき）もいる中での過酷なレースを勝ち抜いてきたこの俺の

努力 は……はい、無駄な妄想、終わり、そして強い風。

やった、点滅の矢印が一つになった。

次の電車が行き去ればこの鉄壁の壁が開く。

頼む、次の電車が来るまでもう一方の矢印は我慢してくれ。

……遅いな、なかなか来ない。

でもまだ点滅は一つの矢印だ。

いいぞ、その調子だ。

やったな、もうすぐ渡れるぞ。

心の声で正面のこどもにメッセージを送ってみる。

届くわけないって

……うっ。

そのこどもの隣にやってきた女性。

なんてタイミングだ、あれはエリちゃんじゃないか。

もうそろそろ一年くらいの片思いの相手だよ。

気まずい、気まずい、気まずすぎる。

今誰か俺のこと、小心者っていったら。

その通りだよ。

うわ、なんか合わせる顔がねえ。

なんか学生の頃、あんまり話したことないけど一応クラスメイトですって子と道でばったり会った時の感じ。

わかるだろ。
わかるよね。

俺、誰に話しかけてんだよ。
ああ、ちよっと訂正、訂正。
遮断機上がるな、上がるな。

幸い向こうは俺に気づいていない。

俺も相手の姿を確認してからは適当に顔の方向をそらす。

できれば引き返したいけどこれだけ待つて引き返すのは試合を棄権したような感じで嫌だからな。

何の試合かはわからないけど。

このまま視線そらしたまんま気づきませんでしたよという感じで
すれ違えばいいんだ。

それが一番だ。

でもなんか気になってちらちら向こうを見てしまっ。

ちら、ちら、もっかい、ちら

……あ、目が合った。

というか向こうは口をあけている。

完全に気付かれた。

そして俺は目線をそらす。

最悪だ。

なんか俺の印象すごく悪くないか。

どうしよう、このまま目線そらしたままだとなんか空気がおかしい。

いや、まてよ。

これは見方によればチャンスじゃないか。

もう一度、もう一度見よう。

相手の目をまっすぐに

……強い風、そして車輪が線路にぶつかる音。
体内の鼓動、これは電車の振動か、それとも。

矢印は一つ、つまりこの電車が行くの間違いなく遮断機が上がる。
風は俺の髪を、服を、そして心までを揺らす、揺らす、揺らす。
風がふと止む。
遮断機が上がる。
空はもう薄い夜の色だ。
アクセル音が聞こえる。
主婦の談笑が聞こえる。
ひとりの女性が向こう側にいる。
目線が合った。

俺、何のために踏切渡るんだっけ。

No.08 空の騎士様

姉姉さまが大人への脱皮を終え、旅立つ時が来た。

丸くて半透明で空気の泡玉のような姿をした姉姉さま。円らな瞳を持つ水の妖精となった姉はこう言った。

「あなたもいつか私のような姫となって旅立つの。旅先で20の姫を産むか、空の騎士と共に黄金の卵を作り水天を抜けて空の世界を目指すかは、あなた次第よ」

姉姉さまが話す空の騎士は、姫しかいないミジンコの世界に伝える伝説のミジンコ。

ミジンコの遺伝子に刻まれた叙事詩は、大人への脱皮を繰り返す私達の心の中で、螺旋のハープの弦を弾いて語り続ける。

『その者、泡の衣をまといて、水天の下に降り立つべし。失われし大地との絆をむすび、ついにミジンコを青き清浄の空へ導かん』

姉姉さまは大きな両手を広げ羽ばたきながら言う。

「そろそろ行かないと。元気でね」

姉姉さまが羽ばたくと、水は渦を巻いて姉姉さまを運んでいく。

私も精一杯に両手を広げて羽ばたく。

「姉姉さまも、お元気で。さよなら」

姉姉さまは私の声に手を振って旅立って行った。バタフライ泳法で。

その日の夕方。私は大人への脱皮を終えた。

私のあとに生まれた妹は、まだ脱皮前の小さな手を振りながら私を見送る。

妹の小さな瞳に映る私は、姉姉さまのような丸くて綺麗な泡玉になっっているかしら。

私は小さな妹を水の渦に巻き込まないように気づかってゆっくりと羽ばたいてみると、妹は小さな手を何回も動かして私を呼んだ。

「姉姉さま」

私の中の遺伝子が波を打つ。螺旋のハープは弦を弾いて叙事詩を語り始める。

「あなたもいつか私のような姫となって旅立つの。旅先で20の姫を産むか、空の騎士と共に黄金の卵を作り水天を抜けて空の世界を目指すかは、あなた次第よ。そろそろ行かないと。元気でね」

「姉姉さまも、お元気で。さよなら」

私は妹に見送られて旅立った。私が見送った姉姉さまと同じバタフライ泳法で。

私はネコゼミジンコ。名前の通り猫背のような背が特徴のミジンコ。

水天に映る空は、シオカラトンボの青色からナツアカネの赤色に変わりつつある。

もうすぐ空はハグロトンボと同じくらい黒くなるだろう。

私は稲の茎の間にある流れの緩やかな場所を見つけて一夜を明かした。

早朝の薄明るい中、私は手を大きく広げて羽ばたいて茎の間から抜け出た。

仲間のミジンコは水天の下でシンクロナイトスイミングをしながら植物プランクトンやバクテリアを食べている。

私も右回転したり左回転したりしながら口の中に入ってくるプランクトンやバクテリアを飲み込んだ。

喉ごしまるやかなツルンとした食感がおいしい。お腹の中ではまだ生きていて胃壁を押し暴れているのもいる。この振動が全身に伝わると、生きている喜びで私は幸せを感じてしまう。

まいうー。太ってもいい。私は食べる。食欲の秋だもの！

気づけば私の猫背の中でも何かが動いている。ご飯以外で動くも

のって何？ 私は考えながら手を広げて羽ばたき続ける。

体に伝わってくる振動は好き。でもだんだん激しくなってくるこの振動は一体なんなの？

振動。激しすぎ。オニキモイ！

「誰か助けて！」

私はスピンを繰り返し錐揉みをする。猫背から伝わる振動は幸せどころか、苦しすぎる。

今の私の両手は、左右バラバラに動いているんだと思う。だってもう連続3回目のムーンサルトだもの。オリンピックじゃない時に月面宙返りをしたって苦しいだけなんだから。イヤー。猫背の振動をなんとかして！！

私が苦しんでいると、大きなミジンコが両手を広げて私を受け止めてくれた。

「ネコゼミジンコさん。今が踏ん張りどころ。しっかりするのよ」

私のスピンを止めてくれたのは、長い鼻をしたゾウミジンコの姉さまだった。長い鼻の姉さまは私の猫背に触れた。

「おめでたよ。中に5姫いるわ」

「5姫？」

目を回している私の猫背を押しながらゾウ顔の姉さまは円らな瞳をグルリと動かして言う。

「クローン妊娠は初めてなの？ 捕食環境がいいと知らないうちに自分のクローンが育つよ。大丈夫。5姫は健康に育っているから、腹式呼吸をすればすぐに楽になるわ。はい。吸って吸って、吐いて。ヒューヒュー、フウー」

私はゾウの姉さまの教えどおりに腹式呼吸をする。

「ヒューヒュー、フウー。ヒューヒュー、フウー」

その後すぐに5姫は私の猫背から産まれ出た。あっという間の出来事だった。

「母さま。母さま」

生まれただけの小さな5姫は、白いビーズのように連なって私

にまわりつく。

「おめでとう。ネコゼミジンコさん！」

「ありがとうございます！ ゾウの姉姉さま！」

しかし喜びも束の間、出産が済んだら私は小さな姫を残してすぐに旅立たなくてはならない。体の大きい私達は周辺のエサを食い尽くしてしまうから。

「私のかわいい大切な姫。元気でね」

「母さま。大好き。母さま。母さま」

私は自分とそっくりの猫背をした小さな姫に別れを告げると、ゾウの姉姉さまと共に旅立った。バタフライ泳法で。

大食の私達は、仲が良くても一緒にいられない。食が少ないと姫を増やせないからだ。

ゾウの姉姉さまは私に別れを告げる。

「ネコゼミジンコさん。お元気で」

「ゾウの姉姉さまもお元気で」

バタフライをしようと手を広げたゾウ顔の姉姉さまは別れ際に言った。

「西で空の騎士が現れたそうよ。西から来たオナガミジンコの姉姉さまから聞いたの。空の騎士に会えるといいわね」

驚く私の前でゾウの姉姉さまは広げた大きな手を振り下ろす。膨よかな体を揺らして大きな水の渦と共に旅立って行った。バタフライ泳法で。

私はまた一人になった。

少し離れた所では、タマミジンコの姉姉さまが背に小さな姫達を背負って泳ぎ、捕食に精を出している。

私の遺伝子は、今も螺旋のハーブを奏で叙事詩を歌い続けている。私は叙事詩に従い大きく広げた手を動かして捕食を始める。ツルツルと口に入ってくるプランクトンやバクテリアを飲み込みながら旋

回して水天に映る空を眺めた。

空の騎士つて、どんな方なのかしら。

バタフライをしている私の耳にギターの音色が聞こえてきた。

ジャジャン ジャジャーン

「みんな、おいらが悪いのか？ 斬られたおめえが悪いのか？ 拙

者。カイミジンコ侍じゃ」

突然の出現に私は手を動かすのを忘れてカイミジンコを見てしま
う。

姿は二枚貝。本体は殻の中にあり顔がどこにあるのか分からない。
ミジンコ特有の大きな手も無い。

「あの、あなたはミジンコですか？」

私が聞くと、カイミジンコはギターを弾いて歌いながら答えた。

「私カイミジンコは ぜんぜんミジンコに似てないって言うじゃ
ない でも、ミジンコと同じ甲殻類ですから！ 残念！！ 約

5億年前から同じ姿。体長約0.6ミリ。精子の長さは体長の10
倍、約6ミリ。斬り！！」

「た、体長の10倍の！！！」

姫として生きる私の口では絶対に言えない驚き。

私が手を広げて驚いていると、彼方から侍と同じ姿のカイミジン
コの姉姉さまが向って来た。花嫁姿のケメコデラックス！ のよう
に。

「空の騎士様！」

カイの姉姉さまの声を聞いて、私の驚きは寒気に変わる。

うそ！ こんなのが空の騎士！！

カイの姉姉さまは甘い声を出して、ギターを奏でている侍を空の
騎士と呼んで近づき寄り添う。

「空の騎士様。お待ち申しておりました」

カイ侍は、まだギター演奏で歌っている。

ジャジャーン

「夜。海中で青く光るウミホタルも、カイミジンコの仲間。切腹！

！」

「空の騎士様。カツコイイー！」

カイ侍とカイの姉姉さまは黄金の卵を作るため、水流が作り出す愛の泡と共に旅立っていった。自由形泳法で。

また私は一人になった。

あれが空の騎士だなんてシヨック。

がっかりする私の耳に軽快なリズムが聞こえてくる。

「誰も彼も浮かれ騒ぎ」

私はもつと静かな場所へ移動しようと思い、バタフライ泳法で進んでいると、姉姉さま達の声が聞こえてきた。

「キヤー。空の騎士様！ こつちを向いて」

空の騎士の寒い現実を知った私には騒ぐ理由が分からない。

早くこの場から去ろうと思いついて移動していると、姉姉さまの集団が軽快なリズムと共に私の方へ押し寄せてきて、私は集団に巻き込まれた。

姉姉さま達は軽快なリズムを聞きながら細い腕を振って踊っている。

「オーレー オーレー ケンミジサンバ」

よく見るとケンミジソコの姉姉さま達。姉姉さまの輝く瞳の先には、スマートな姿でステップを踏んで踊っている空の騎士がいた。

「サンバ ビバ サンバ ケン・ミ・ジ サンバ オレ！」

気づくと私は腕を振って踊っていた。

私を躍らせるとは、これが伝説の空の騎士というもののなの。なんてオニキモイ！

姉姉さま達は踊りが終わると、一斉に叫んで自分自身をアピールする。

「ケンさま！ こつちを向いて！ 空の騎士！ ケンさま！」

そうまでしてあの空の騎士と黄金の卵を作りたいのか？

私の疑問は続いていたけど、今度の空の騎士はスマートでオニ甘の顔だったので、姉姉さま達が騒ぐ理由が少しだけ分かる気がした。ケンミジンコ一座は地方公演を続けるために踊りながら旅立って行った。犬かき泳法で。

姉姉さま達の誘いを断った私はまた一人になった。

水天に映る秋の空は今も青い。

空の騎士に憧れていた私の心は秋空のように冷えていた。

一人でいるのは淋しい。でも訳の分からない空の騎士と一緒にいると、こつちまでおかしくなってくる。

私が一人静かに泳ぎながら植物プランクトンを飲み込んでいると、私にそっくりのミジンコが現れた。

「姫。お一人ですか？」

「あなたは？」

「ネコゼミジンコの空の騎士と申します」

え！ このミジンコが！！

彼はしなやかな腕を振るたびに小さな泡を作り、私を見つめて周りをゆっくりと泳いでいる。

これが泡の衣なのかしら。

空の騎士は手を広げて私に触れた。

「よかつたら一緒に水天を抜け空まで泳ぎませんか？」

この空の騎士は、騎士というより貴公子だわ。彼と一緒に黄金の卵を作れたら、私はきつと幸せになれる。

「はい。喜んで。空の騎士様」

私が空の騎士と手を取りあって泳ごうとした時、遠くから姉姉さまの怒号が届いた。

「あたしがいないうちに、ほかの姫に手を出すんじゃないわよ！」

「ゲ！ ヤバイ！」

うるたえる空の騎士。

私の心の鏡に映った空の騎士の姿が粉碎する。

これは一体どういう事なの？

激しく腕を振って現れたのは、同じ猫背をした姉姉さまだった。彼女の猫背に何匹かの姫が入っている。姉姉さまは勇ましく近づいて空の騎士の隣にいた私を突き飛ばした。

「あんだ。バカ？」

何。この女。バカって、失礼よ！

私を手を大きく広げて平手打ちの準備をした時、姉姉さまは空の騎士を引き寄せながら言った。

「あたしらはニセネコゼミジンコ。あんたらネコゼミジンコとは違うの。うちのイケメンに惚れないでよ。この泥棒猫！」

ニセネコゼだったの。ガーン！

「この空の騎士は、アカサギ、シロサギ、クロサギと肩を並べるイケメンのミジサギなの。これからは騙されないように気をつけるのね」

彼が超有名なミジサギだったなんて。私は騙されていたのね。危なかった。全てを奪われるところだった。

ニセネコゼの姉姉さまは小さな姫を背負い、空の騎士を連れて旅立って行った。私と同じバタフライ泳法で。

私はまた一人になった。

もついいの。空の騎士なんていらぬ。20の姫を産む。

そう決心をして一人で泳ぐ私の手に水天が当たった。

あんなに高かった水天が低くなっている。ちよつと息苦しい。どうしてなの？

「大地との絆を結ぶ時が近づいているからだ。我が姫よ」

私の目の前に現れたのは、私より小柄のネコゼミジンコの空の騎士だった。

小柄な姿を見た瞬間、私の中にある遺伝子のハープが高鳴った。

堂上教官、じゃなくて。彼が本物のネコゼミジンコの空の騎士様

！！！！

私はなんの迷いもなく空の騎士の手を取った。
すると彼の遺伝子のハーブも高鳴り、私と一緒に二重奏を奏でた。

それから私は空の騎士と幸せな時間を過ごして猫背に黄金の卵を作った。

水天が落ちてきても、空の騎士と一緒にいた私には、恐れも苦しみもなかった。

そしてついに田は干上がった。

水天を抜けた私は空を見た。

空の世界には風があった。手を広げて羽ばたけば風を起こす事もできる。でも、もう水の泡はできなかった。

青い空は、水天よりも高くて広がった。

私はこの記憶を最後に15日の短い人生を終えた。

ねっとりした夢に沈んでいた。

遠くに、青く澄んだ空が見えた。ちぎれ雲が浮かんでいる。そこまで行けば、自由になれるような気がした。やみくもにもがいて腕を振り回す。右手の甲が何かに当たった。痛みで意識が覚醒する。プールの底から浮かび上がる気分で、私は目を覚ました。

秋だというのに、Tシャツが少し汗ばんでいる。窓を開けると、風に乗って金木犀が香った。

足元にCDが一枚落ちていた。空色のジャケットには見覚えがあった。五月の晴れ渡った日に、尚哉から貰ったものだ。あれから五ヶ月が過ぎた。ケースを開くと、手製のメモが挟んである。書き殴ったような文字で、たった一行記されている。

みーなへ もし良かったら僕とつきあってほしい 尚哉

こんなメモが入っているなんて、CDを渡された時には知らなかった。無造作に受け取った自分の態度を思い出し、胸が痛む。尚哉の気持ちを受け止められなかった私に、これを持っている資格はない。返しに行くべきではないか。不意にそう思った。

尚哉と私は、幼稚園の頃からの腐れ縁だ。当時、私たちが住んでいたのは、日当たりの良さだけが取り柄の、2DKのアパートだった。一緒に登園し、帰ってから毎日のように遊んでいた。疎遠になったのは、尚哉たち一家が戸建てに引っ越してからだ。小三の時だった。

高台にある、白い壁とオレンジ色の瓦屋根の新居は、尚哉の母、真行寺のおばさんが手作りするバースデイケーキみたいにきれいだった。おばさんは引っ越した後も私を歓迎してくれたが、母はそれ

を快く思っていなかったようだ。

こぎれいな一戸建てに移り住んだ真行寺家と、離婚が成立しても、父からの養育費が滞る我が家。高校生になった今なら、母の気持ちに少しわかる。彼女なりの羨望と嫉妬の表れだったのだと。

寝乱れた髪の毛を手早く束ね、羽織ったパーカーのポケットにCDを入れた。緩やかな坂道を行くと、懐かしい家が見えた。

「まあ、久しぶりねえ、水菜ちゃん。すっかりきれいなお嬢さんになって、見違えちゃったわ」

無沙汰を詫びる私に、おばさんの眼差しは昔と変わらず穏やかだ。「ちようどよかった。さつきケーキを焼いたところなの。キャラメルシフォンよ。いま紅茶をいれましょうね」

嬉しそうに語るおばさんの様子に、CDを返しに来ただけですとは、言い出せなかった。諦めてスリッパに足を通した。

生クリームが添えられたシフォンケーキは、頬張ると淡雪のように溶ける。香りの良い紅茶を飲みながら、おばさんの話を聞いた。尚哉と私が幼稚園のお昼寝の時、隣同士じゃないとイヤだと互いに駄々をこねたこと。同じアパートに住んでいた頃、どちらかの家で遊び疲れると、そのまま寝て朝になってしまったことなど、あらためて聞くと気恥ずかしい。

ふと首筋をひんやりとした空気が撫でた。窓も玄関も開いていない。不思議に思っていると、

「あら、いま羅漢さんが通ったのね」

おばさんは事もなげに言った。唐突な言葉に、私は面食らう。「風もないのに空気が流れる感じがするでしょう？ この家は、霊の通り道になってるかもしれないわね」

そんな現象に遭って怖くないのだろうか。

「風が流れるだけで、特に実害はないの。小学生の頃だったか、尚哉がそれを『羅漢さんが通った』って呼んでね」

怖さはまったく感じないのよと、おばさんは微笑み、転がるよう

なソプラノで、懐かしいわらべうたを口ずさんだ。

羅漢さんがそろたら まわそじゃないか よいやさのよいやさ

歌声に呼応するように、ドアチャイムが鳴った。回覧板を届けに来た訪問者は、おばさんを話し相手に、帰る気配がなかった。諦めて食器を片づけに立ち上がる。きれい好きのおばさんらしく、台所は磨きこまれている。

カウンターの上には、さっき食べたキャラメルシフォンの他に、リンゴのタルト。ブラウニーにパウンドケーキ。すぐにもケーキ屋が開けそうな量だ。

熟れすぎた果実みたいな匂いが鼻をつく。薄緑色の抹茶クリームを塗られているように見えたケーキは、近づくとかびに覆われていた。小さな悲鳴が漏れる。その隣には、形の崩れた焦げ茶色の物体がある。元はフルーツケーキのようだったが、透明なケーキカバールの内側では、小バエが二匹もつれあって飛んでいた。

「水菜ちゃん」

呼びかけられてギクリとする。

「話の長い人で困っちゃうわ。あら、見つかったのね。うふふ、尚哉がね、母さんの作るケーキは世界一だから、たくさん焼いてって言うのよ」

私は相槌も打てず、呆然と見つめ返す。樂しげに語るおばさんの表情から、仮面が剥がれ落ちるように笑顔が消えた。

「ああ、何を言ってるのかしら。尚哉は……もういないのに」
支えを失ったように床にへたりこむ。か細い泣き声が、私の胸を衝いた。

「尚哉は死んだってわかってるはずなのに。水菜ちゃん、あなたが見つけてくれたのよね」

あの日、学校の花壇のそばで倒れていた尚哉を発見したのは、下校しようとしていた友人と私だった。花壇のレンガには赤黒い染み

が広がり、腕はありえない方向に曲がっていた。救急車を呼んだが既に事切れていた。校舎三階の庇には上履きで滑ったような痕があり、そこから転落したのではと思われた。事故と自殺の両面で捜査されたが、結論は出なかった。遺書も見つかっていない。

「尚くんに借りていたCDを見つけたんです。今日はそれを返しにきました」

嗚咽がやむのを待って話しかけると、おばさんは泣き笑いの表情になった。

「あの子を思い出してくれてありがとう。尚哉の部屋は、まだそのままにしてあるの。どうかゆっくりして行ってね」

二階にある尚哉の部屋は、夕暮れの陽射しを浴びて、フローリングが鈍く光っている。机に積まれた辞書や参考書、ベッド脇に置かれた音楽雑誌。ただいまと言って鞆を置いたら、生活が始められそうだった。だが、この部屋に主が帰ってくることはない。使いこまれた勉強机に、私はそっとCDを置いた。

「警察の人は、発作的に自殺をするケースはありますって言ったわ。わたしにはそう思えないと、おばさんは悲しげに首を振る。

「あの子が夢に出てくるの。母さん、僕は自殺じゃないよって」

図書委員なので、書庫で本の整理をしていました。帰りに吹奏楽部の藤巻さんと出会って、お喋りしながら昇降口を出ました。そこで……見つけたんです。とても驚きました。人が落ちたような音は……わかりません。いいえ、放課後、真行寺君の姿は見ていません。学校の先生や警察の人には、そう答えた。泣きながら語る私を見て、疑う人は誰もいなかった。

「亡くなる少し前、あの子は同じCDを二枚買ってきた。みーなに一枚あげたいんだって言ったわ。照れくさそうだったから告白するのになって思った。尚哉は、ずっとあなたが好きだったもの」

おばさんは震える声で言うと、私の肩に手を置いた。

「あなたは、亡くなる前の尚哉と会ったはずよね。何があったの？」

あの日、書庫の整理に飽きた私は、いつもの場所で本を読んでいった。

三階にある書庫の外側には、柵のない陸屋根がある。四畳ほどの空間を、私はこっそりお気に入りの場所にしていた。

朝方まで降っていた雨で、眼下に見える新緑は鮮やかさを増していた。図書室にあるクッションを一個持ちこめば、快適な屋外席の出来上がりだ。

「いいなあ。特等席だね」

急に声をかけられて、とても驚いた。この場所は、誰にも知られていないと思っていたから。私の戸惑いを気にせず、尚哉はCDを差し出した。

「これ、プレゼント。良かったら聴いてみて」

「ふーん、ありがと」

読書を中断されたので、愛想のない返事をした。尚哉と会話をするのにも久しぶりだった。

「何。まだなんか用？」

問われて尚哉は、絞り出すような低い声で言った。

「いつから、君は援助をやっているんだ」

「急に何言ってるのよ」

「やめてくれ。みーな、頼むから」

「その名前で呼ばないで。それに私がどんなバイトをしようと、あなたの知ったことじゃないわ」

尚くんでも真行寺君でもなく、あなたと呼んだことに、尚哉は傷ついた様子だった。

「見たんだよ。一ヶ月ぐらい前に、君が社会人っぽい男の人とホテルへ入っていくのを」

はじめは恋人だと思った。少し驚いたけど、友達として喜ぶべき

ことだ。次の週末、駅前の噴水のところで、また君を見たんだ。誰かと待ち合わせしてるみたいだった。現れたのは中年の男性だったよ。それから気になって……悪いけど、君のこと尾行させてもらった。

苦い薬を飲み下すみたいな顔で、尚哉は一気に喋った。シャツの下をイヤな汗が伝う。

「ストーカーみたいなことしないで。ほっといてよ」

「僕は知っていることをすべて、永井先生に話すよ」

顔から血の気が引いた。いま担任の永井にチクられたら、太鼓判を押されている学内推薦がフイになる。

卒業後は、専門学校に進みたいと考えていたが、我が家の経済状態では厳しかった。貯えなど無きに等しい。在学中から資金を貯めようと思った。もちろん普通のバイトもした。援助に手を染めたのは、単に効率が良かったからだ。

私の処女は五万で売れた。名前も覚えていない男との行為に、何の感傷も湧かなかった。心が麻痺しているのかもしれない。

私を激昂させたのは、立ち去ろうとした尚哉の、憐れみに満ちた視線だった。何不自由なく暮らす彼に、私の気持ちがかかるはずもない。

「待ちなさいよ」

夢中で細身の体にむしゃぶりついた。揉み合いながら、コンクリートの床に倒れた。後頭部を打つたらしく、私には数分間の記憶がない。目を開けると、澄みきった青空が見えた。雲がゆっくりと動いている。おそろおそろ下を覗き、動かなくなった尚哉を見つけたのだ。唇を噛んで悲鳴を堪えた。心臓が早鐘のように鳴っていた。

制服のホコリを払い、クッションと本、CDを抱えて、片開きの窓に体を押しこんだ。私が尚哉を殺したのかもしれない。書庫に戻ってからも動悸は鎮まらなかった。そこから先は、警察の人に話した通りだ。あの日見た空が、網膜に焼きついて離れない。責めるように、毎夜夢に出てくるのだ。

「お願い、本当のことを教えて」

振り向くと、おばさんの手に鈍く光るモノが握られていた。喉がひりついて言葉が出ない。あの包丁が、体にめりこんだら痛いだろうか。背中当たる切っ先を感じながら、瞼を閉じた。

不思議なことが起こったのは、その時だ。

窓も開いていないのに、風が舞った。柔らかく温かい風だ。つむじ風のように首筋にまとわりついた。

「尚哉なの？」

おばさんが甲高い声で叫ぶ。風が、そよと頬を撫でた。

「わたしだったら……何てことを……」

ゴトリと音がして、おばさんは包丁を取り落とす。床にうずくまったまま、尚哉、尚哉と呟き続けていた。風は薄い膜のようになって、私の体を覆っている。人肌の温もりに包まれ、私は風の囁きを聞いた。

みーな、みーな、思い出して

ヒトゴロシの私に、何を思い出せと言っのか。脳裏にあの日の青空が浮かんだ。ぐるりと景色が回る。記憶の中で誰かが叫んでいる。

「みーな、危ないっ！」

コンクリートの床に倒れた時、誰かの手が私を守ってくれた。

あのね、おひるねすると、こわいゆめをみるの。みーな、ねむれない。

じゃあ、ぼくのとなりにおいで。てをつないであげる。

うん。みーな、なおくんとてをつないだら、こわくないよ。わるいひとがゆめにでてきたら、なおくん、やっつけてね。

だいじょうぶ、ずっといっしょにいるよ。

卑怯者の私を、最後まで守ってくれたのは、尚哉だった。こんな私のために。胸の奥から熱い奔流が突き上げる。

失った記憶の断片を取り戻すと、風は嘘のように止んでいた。

おばさんは床に座りこみ、小さな声でわらべうたを歌っていた。遠くを見つめ、穏やかに微笑んでいる。

羅漢さんがそろたら まわそじゃないか よいやさのよいやさ

私は話さなければならぬ。本当のことを。

「おばさん、あのね……」

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3912f/>

【企画】覆面小説家になろう～空～

2010年10月8日15時56分発行